

Title	心理的支えに関する研究-ソーシャル・サポート志向性、孤独感、個人志向性・社会志向性との関連-
Author(s)	串崎, 真志
Citation	大阪大学教育学年報. 3 p.43-p.52
Issue Date	1998-03
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12662">https://doi.org/10.18910/12662</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 心理的支えに関する研究

### —ソーシャル・サポート志向性、孤独感、個人志向性・社会志向性との関連—

申 崎 真 志

#### 【要旨】

心理的支えとソーシャル・サポート志向性、孤独感（共感性、個別性）、個人志向性・社会志向性との関連を検討するため、専門学校生と大学生75名を対象に質問紙調査を実施した。心理的支え尺度（短縮版）を因子分析した結果、内面的支え、友人父母による支え、恋人による支え、宗教性による支えの4因子が抽出され、ほぼ想定通りの因子が得られた。「友人父母による支え」は、ソーシャル・サポート志向性との間に有意な相関がみいだされた。心理的支えのすべての尺度は孤独感の共感性尺度との間に相関がみられたが、個別性尺度との間には相関がみられなかった。また、内面的支えは、個人志向性・社会志向性の双方との間に相関がみられた。これらの結果は、内面的支えが、単に自分を内面的に支えるというだけではなく、内的・外的規範を重視する姿勢につながることを示唆している。内面的支えは、われわれが現実的次元をしっかりと生きていくために重要な支えであると考えられる。

#### 1. はじめに

申崎（1997b）では、心理的支え（psychological support）を「自分が、なにかによって、なんらかのかたちで支えられていると感じていること」と定義し、対人的支え（interpersonal support）、内面的支え（intrapersonal support）、宗教性による支え（transpersonal support）などに分類して概観した。対人的支えとは、社会心理学でいうソーシャルサポート（social support；嶋，1996a）であり、外的世界の他者との関係における支えである。内面的支えとは、特に、その人がもっている思考様式、信念、人生観などが相当する。これらは、われわれが現実的次元をしっかりと生きていくうえで必要な支えであろう。また、宗教性による支えとは、自他を超えるものとのつながりを感じることによる支えであり、これは、われわれが死を前提とした生を、あるいは自らの「異界」（小松，1993）<sup>1)</sup>をどう生きるかを考えていくうえで重要になってくると思われる。

心理的支えについて考えていくとき、それを“どれくらい感じているか”という視点は重要であるが、それを“どれくらい欲しているか”という視点も見逃すことはできないだろう。いわば、心理的支えの欲求（need for psychological support）の研究である。例えば、社会心理学のソーシャルサポート研究においても、近年、このような点が注目されている。周（1994，144頁）は、サポートを「必要とするサポート」「知覚されたサポート」「実行されたサポート」の3つの側面から捉えることを提唱しているし、和田（1989，35頁）は、「現在得られるサポートの程度が重要なのではなく、必要と感じているサポートがどれだけ得られるかが重要である」と述べている。また、最近では、「サポートの seeking」（川原・平林，1995）や「ソーシャル・サポート志向性」（嶋，1994，1996b）についての研究もある。

心理的支えとその欲求とはどのような関連があるのだろうか。本研究では、嶋（1994）の作成

したソーシャル・サポート志向性尺度を用いて、心理的支えとの関連を検討することを目的とする。ソーシャル・サポート志向性とは、「困ったときなどに自力だけで問題解決を図るのではなく、周囲の人々からの援助を積極的に受け入れたり、自ら援助を求めようとする傾向」（嶋, 1996b, 20頁）のことであり、これは、心理的支えのなかでも、特に对人的支えと関連が高いと考えられる。また、孤独感や個人志向性・社会志向性との関連もあわせて検討したい。

## 2. 方法

**対象者** 専門学校生39名（男性22名、女性17名）、大学3～4年生36名（男性9名、女性27名）、合計75名（男性31名、女性44名）。年齢は、年齢範囲19～28歳、平均年齢20.45歳、標準偏差1.68であった。

**調査時期** 1996年4～5月。質問紙は、心理学の講義時間を利用して集団で実施した。

**質問紙の構成** 質問紙は以下の4つの尺度で構成された。

### ①心理的支え尺度（短縮版）

串崎（1996, 1997a）で作成した6因子46項目からなる心理的支え尺度から、各因子に因子負荷量が高い項目（.60以上）を23項目選び、心理的支え尺度の短縮版を作成した。各項目の回答は、「1＝ぜんぜんそう思わない」から「5＝まったくそう思う」の5件法。逆転項目は設定していない。

### ②ソーシャル・サポート志向性尺度（嶋, 1994）

「個人的な悩みごとや困ったことがある状況を想像してください（例えば、学業や進路上の問題、対人関係のトラブル、身体的な問題など）。その時、あなたはどのように考え、行動しますか」という質問で、「1. 自分自身の問題なのだから、できるだけ自力で解決する（逆転項目）」「2. 他人に助言やアドバイスを求めることには抵抗を感じる（逆転項目）」「3. ひとりで悩むよりは誰かに相談する」「4. 自分のことは自分自身がいちばんわかっているのだから、結局は自分だけが頼りであると思う（逆転項目）」「5. 知らないことわからないことはどんどん人に聞く」など、12項目からなる。各項目の回答は、「1＝まったくあてはまらない」から「5＝非常によくあてはまる」の5件法。

### ③孤独感の類型判別尺度（LSO：落合, 1974, 1983a, 1983b）

青年期の孤独感を、人間同士は理解・共感できると思っているか否か（共感性尺度）、人間の個性性に気づいているか否か（個別性尺度）、という2つの次元から測定するもの。5件法。

### ④個人志向性・社会志向性尺度（伊藤, 1993a, 1993b, 1993c）

個性や独自性を尊重しつつ自分自身の内的な基準に従った生き方への志向性（個人志向性）と、他者との強調を大切に社会規範に適応した生き方への志向性（社会志向性）の2つについて測定するもの。5件法。

### 3. 結果

#### (1) 心理的支え尺度（短縮版）の因子分析

「ぜんぜんそう思わない」から「まったくそう思う」をそれぞれ1～5点として得点化した。なお、回答に記入もれがある場合、欠測値として処理した。したがって、回答者の合計が75名にならない項目がある。

まず、心理的支え尺度（23項目）の尺度総得点を算出し、専門学校生と大学生との間で、平均値に差があるかどうかを検討するため、t-testを行なった。その結果、両群に有意な差はみられなかった（専門学校生  $m=72.13$ ，大学生  $m=68.86$ ； $t(73)=.95$  ns）ため、以下、両群を込みにして分析を行なった。

記入もれのある41名（男性18名、女性23名）を除いた34名（男性13名、女性21名）で、心理的支え尺度23項目について、因子分析（主成分分解，Varimax 回転）を行なった。その結果4項目を削除し、最終的に4因子19項目をもって心理的支え尺度の短縮版を構成した（表1）。

項目の内容から、第I因子は「内面的支え」、第II因子は「友人父母による支え」、第III因子は「恋人による支え」、第IV因子は「宗教性による支え」として、それぞれ解釈された。

表1 心理的支え尺度（短縮版）の因子分析の結果

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
<b>I. 内面的支え</b>					
・人生には苦しいときもあるが、基本的に自分の将来はチャンスと可能性に満ちていると思うと、気が楽になる。	.832	-.174	-.022	.054	.726
・現在の自分の位置（立場）を考えると、「自分もよくやってきたな」と思う。	.701	.313	-.005	.101	.600
・自分の生きてきた人生をふりかえってみると「これまでよくやってきた」と思う。	.684	.235	-.065	.368	.663
・私は、自分が現在の位置（立場）にいることを誇りに思う。	.612	.461	.095	-.040	.598
・苦しいときでも、自分の可能性を信じて頑張ることができる。	.607	.213	.478	.253	.705
・自信をなくしているときでも、「頑張れば道は開ける」と思って、気を取り直すことができる。	.603	.142	.385	-.046	.534
(私の父親は、良いところも悪いところも含めて、私のことを認めてくれる。)	.488	.149	.371	.038	.399
<b>II. 友人父母による支え</b>					
・私の母親は、必要なときにお金や物を援助してくれたり、必要に応じて適切なアドバイスをくれたりする。	.173	.819	-.066	.082	.712
・私の友人は、ふだんから私の気持ちや感情をよく理解してくれる。	-.038	.776	.194	.312	.739
・私の母親は、良いところも悪いところも含めて、私のことを認めてくれる。	.443	.715	-.010	-.010	.708

表1 心理的支え尺度(短縮版)の因子分析の結果(つづき)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
・私の友人は、私が落ち込んでいるときに、 慰めたり励ましたりしてくれる。	.131	.634	.512	.092	.690
・私の友人は、良いところも悪いところも含めて、 私のことを認めてくれる。	.220	.499	.257	.081	.370
・私の父親は、必要なときにお金や物を援助して くれたり、必要に応じて適切なアドバイスを くれたりする。	-.129	.416	.119	.498	.452
(私には、親や友人・恋人の他に、私が落ち 込んでいるときに、慰めたり励ましたりし てくれる人がいる。)	.066	.396	-.069	.394	.321
Ⅲ. 恋人による支え					
・私の恋人は、私が落ち込んでいるときに、 慰めたり励ましたりしてくれる。	-.014	-.162	.814	-.062	.694
・私の恋人は、必要なときにお金や物を援助 してくれたら、必要に応じて適切なアドバ イスをくれたりする。	.142	.415	.739	.007	.738
・私の恋人は、ふだんから私の気持ちや感情 をよく理解してくれる。	.160	.338	.735	.169	.709
・私の恋人は、良いところも悪いところも含 めて、私のことを認めてくれる。	.360	.426	.689	.069	.791
(もし現在の仕事(勉強)を失ったら、生き る意欲をなくしてしまうだろう。)	.096	.256	-.595	-.186	.463
Ⅳ. 宗教性による支え					
・私は、私の人生観、世界観、価値観の基準 となっているような宗教(あるいは自分な りの信念)をもっている。	.473	-.044	.060	.810	.885
・私は、心のよりどころや生きがいとなっ ているような宗教(あるいは自分なりの信念) をもっている。	.484	-.024	.068	.800	.879
・私にとって、宗教は、心の安らぎや幸せを 感じさせるものである。	-.130	.138	.058	.737	.582
(私には、親や友人・恋人の他に、ふだんか ら私の気持ちや感情をよく理解してくれる 人がいる。)	.113	.128	.368	.451	.367
固有値	7.450	2.612	2.207	2.056	
寄与率(%)	32.4	11.4	9.6	8.9	62.3

注 因子分析(主成分分解、Varimax 回転)を行った結果、4項目(カッコ内の項目)を  
削除し、最終的に4因子19項目をもって尺度を構成した。

(2) 心理的支え尺度の平均値と標準偏差

心理的支え尺度の平均値と標準偏差を表2に示した。なお、「Ⅱ. 恋人」に関する項目の数値は、恋人がいると回答した35名（男性13人、女性22人）のものとなっている。

性差を検討するため、t-testを行なった。その結果、「Ⅱ. 友人父母による支え」に有意な差がみられた ( $t(73)=4.19 p<.001$ )。すなわち、女性は、男性に比べて、友人や父母によって心理的に支えられていると感じていることが明らかになった。また、信頼性の指標として、Cronbachの $\alpha$ 係数を求め、表2に示した。尺度総得点において $\alpha=.89$ 、各因子においても、 $\alpha=.81\sim.87$ であり、内的整合性は高いと考えられる。各因子間の相関係数をPearsonの相関係数によって求め、表4に示した。

他の尺度についても、得点が高いほど当該尺度の傾向が高くなるようにそれぞれ1～5点を付与して得点化し、その平均値と標準偏差を表3に示した。性差を検討するためt-testを行ない、その結果、ソーシャル・サポート志向性に有意な差がみられた ( $t(73)=2.56 p<.05$ )。すなわち、女性は、男性に比べて、ストレスフルな状況下において他者からのサポートを求める傾向が高いことが明らかになった。Cronbachの $\alpha$ 係数を表3に、尺度間の相関を表5に示した。

表2 心理的支え尺度の平均値と標準偏差

尺度	全体 (N=75)	性別	
		男性 (N=31)	女性 (N=44)
I 内面的支え (6項目; $\alpha=.83$ )	20.77 ( 4.83)	21.00 ( 5.36)	20.61 ( 4.48)
II 友人父母 (6項目; $\alpha=.81$ )	22.79 ( 4.49)	20.45 ( 4.56)	24.43*** ( 3.66)
III 恋人 (4項目; $\alpha=.87$ )	15.74 ( 4.13)	15.46 ( 3.20)	15.91 ( 4.65)
IV 宗教性 (3項目; $\alpha=.83$ )	7.25 ( 3.69)	7.74 ( 3.93)	6.91 ( 3.52)
尺度総得点 (19項目; $\alpha=.89$ )	58.16 ( 13.84)	55.68 ( 15.47)	59.91 ( 12.45)

注1. カッコ内の数値は標準偏差を示す。  
 注2.  $\alpha$ はCronbachの $\alpha$ 係数を示す。  
 注3. 有意水準 (t-test) : \*\*\*  $p < .001$   
 注4. 「III恋人」は N=35 (男性13人、女性22人)。

表3 各尺度の平均値と標準偏差

尺度	全体 (N=75)	性別	
		男性 (N=31)	女性 (N=44)
サポート志向性 (12項目; $\alpha=.57$ )	40.59 ( 5.99)	38.55 ( 5.73)	42.02* ( 5.81)
LSO共感性 (9項目; $\alpha=.71$ )	36.67 ( 5.72)	35.26 ( 6.02)	37.66 ( 5.35)
LSO個別性 (6項目; $\alpha=.82$ )	17.79 ( 5.71)	17.16 ( 5.68)	18.23 ( 5.76)
個人志向性 (7項目; $\alpha=.54$ )	24.51 ( 4.55)	25.42 ( 4.56)	23.86 ( 4.49)
社会志向性 (9項目; $\alpha=.62$ )	34.88 ( 4.65)	34.19 ( 5.37)	35.36 ( 4.07)

注1. カッコ内の数値は標準偏差を示す。  
 注2.  $\alpha$ はCronbachの $\alpha$ 係数を示す。  
 注3. 有意水準 (t-test) : \*  $p < .05$

表4 心理的支え尺度の下位尺度間の相関

	1	2	3	4
1. 内面的支え	—			
2. 友人父母	.43**	—		
3. 恋人	.44**	.47**	—	
4. 宗教性	.44**	.23	.19	—
5. 尺度総得点	.71**	.62**	.72**	.47**

注1. N=75 (「恋人」は N=35)

注2. 有意水準: \*\* p &lt; .01

表5 各尺度間の相関

	1	2	3	4
1. サポート志向性	—			
2. LSO共感性	.26**	—		
3. LSO個別性	-.17	-.34**	—	
4. 個人志向性	-.20	.43**	.03	—
5. 社会志向性	.13	.56**	-.29*	.36**

注1. N=75

注2. 有意水準: \* p &lt; .05; \*\* p &lt; .01

### (3) 心理的支えと他の尺度との相関

心理的支え尺度と他の尺度との相関を Pearsonの相関係数によって求めた。

まず、全体サンプルについてみてみよう(表6)。ソーシャル・サポート志向性は、「Ⅱ. 友人父母による支え」との間に、有意な弱い相関( $r=.30$ )がみいだされた。すなわち、ストレスフルな状況下において他者からのサポートを求める傾向が高いほど、友人や父母から心理的に支えられていると感じていることが明らかになった。

孤独感の共感性尺度は、心理的支え尺度のすべての因子との間に、有意な弱いないし中程度の相関( $r=.27\sim.55$ )がみいだされた。すなわち、人間同士は理解・共感できているほど、心理的に支えられていると感じていることが明らかになった。一方、個別性尺度では有意な相関はみいだされなかった。

個人志向性は、「Ⅰ. 内面的支え」との間に有意な中程度の相関( $r=.50$ )が、「Ⅳ. 宗教的支え」との間に有意な弱い相関( $r=.29$ )がみいだされた。すなわち、個性や独自性を尊重しつつ自分自身の内的な基準に従った生き方への志向性が高いほど、内面的な支えや宗教性による支えを感じていることが明らかになった。一方、社会志向性は、「Ⅰ. 内面的支え」との間に有意な中程度の相関( $r=.54$ )が、「Ⅱ. 友人父母による支え」との間に有意な弱い相関( $r=.32$ )がみいだされた。すなわち、他者との強調を大切にし社会規範に適応した生き方への志向性が高いほど、内面

的な支えや友人父母による支えを感じていることが明らかになった。

次に、これを男女別に算出したものを表7に示した。ソーシャル・サポート志向性は、女性サンプルでのみ、「Ⅲ. 恋人による支え」との間に有意な中程度の相関 ( $r=.48$ ) がみられた。男性サンプルでは有意な相関はみいだされなかった。

孤独感の共感性尺度では、男女とも、「Ⅰ. 内面的支え」「Ⅱ. 友人父母による支え」との間に有意な中程度ないし強い相関 ( $r=.46\sim.63$ ) がみられたが、その値は男性のほうが女性に比べて高かった。また、「Ⅲ. 恋人による支え」との間には、女性サンプルのみ有意な中程度の相関 ( $r=.57$ ) がみられ、男性サンプルでは有意な相関はみいだされなかった。一方、個別性尺度では、男女とも有意な相関はみいだされなかった。

個人志向性・社会志向性は、男女とも、「Ⅰ. 内面的支え」との間に有意な中程度の相関がみられたが、その値は男性のほうが女性に比べて高かった。また、「Ⅱ. 友人父母による支え」「Ⅳ. 宗教的支え」との間には、女性サンプルのみ有意な中程度の相関がみられ、男性サンプルでは有意な相関はみいだされなかった。

表6 心理的支え尺度得点と各尺度得点との相関 (全体)

	サポート志向性	LSO共感性	LSO個別性	個人志向性	社会志向性
I. 内面的支え	-.07	.52**	-.06	.50**	.54**
II. 友人父母	.30**	.55**	-.12	.09	.32**
III. 恋人	.31	.50**	-.28	.21	.19
IV. 宗教性	-.13	.27*	-.11	.29*	.22
尺度総得点	.09	.55**	-.16	.38**	.41**

注1. N=75 (「恋人」はN=35)

注2. 有意水準: \*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$

表7 心理的支え尺度得点と各尺度間の相関 (男女別)

	サポート志向性	LSO共感性	LSO個別性	個人志向性	社会志向性	
I. 内面的支え	男性	-.30	.63**	.02	.56**	.66**
	女性	.14	.46**	-.12	.45**	.43**
II. 友人父母	男性	.22	.57**	-.25	-.13	.28
	女性	.20	.48**	-.13	.48**	.31*
III. 恋人	男性	-.16	.27	.04	.20	.31
	女性	.48**	.57**	-.41	.27	.16
IV. 宗教性	男性	-.05	.34	.02	.05	.15
	女性	-.14	.26	-.20	.46**	.33*
尺度総得点	男性	.04	.63**	-.17	.31	.51**
	女性	.06	.45**	-.19	.52**	.27

注1. 男性 N=31; 女性 N=44

(「Ⅲ. 恋人」は男性 N=13, 女性 N=22)

注2. 有意水準: \*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$



#### 4. 考察

ソーシャル・サポート志向性については、嶋(1996b)が詳細に検討しているので、その結果と比較しながら考察してみたい。

まず、ソーシャル・サポート志向性については、有意な性差がみられた。すなわち、女性は、男性に比べて、ストレスフルな状況下において他者からのサポートを求める傾向が高いことが明らかになった(表3)。嶋(1996b)も同様の結果を見いだしている。このことは、女性のほうが、他者に依存しやすいということの意味するのであろうか。嶋(1996b)によると、ソーシャル・サポート志向性は「他者からの援助を能動的に引き出す」(嶋, 1996b, 22頁)というニュアンスをもっており、「むしろ依存性のポジティブな側面に焦点を当てたものになっている」(嶋, 1996b, 26頁)という。実際、彼の研究では、ソーシャル・サポート志向性は、他者依存性尺度とは関連がない、もしくは負の相関があるという結果となっている(嶋, 1996b)。このように、比較的ネガティブなイメージでとらえられてきた依存性と異なり、ソーシャル・サポート志向性は、他者からのサポートをうまく活用する能力に関連すると考えられ、ポジティブにとらえることが可能であろう。そして、女性のほうがそのような傾向が高いといえる<sup>2)</sup>。

次に、ソーシャル・サポート志向性と心理的支えとの相関をみてみよう。全体サンプルでは、「Ⅱ. 友人父母による支え」との間にのみ、有意な弱い相関がみいだされた(表6)。ソーシャル・サポート志向性をポジティブな意味でとらえるならば、他者からのサポートをうまく活用する能力の高い人ほど、对人的支えを多く感じているのは当然であろう。なお、嶋(1996b)の結果では、家族、同性の友人、異性の友人のなかでは、同性の友人からのサポートと関連が深いことを見いだしている。おそらく、「友人と比べると、家族関係は、血縁という絆により結びつけられているためか、サポート志向性の高低に関わりなく(自らサポートを求めようとしない人に対してもある程度の)援助がなされるためと考えられる」(嶋, 1996b, 33頁)。

さて、孤独感の共感性尺度と心理的支え尺度に相関があるのはうなずけるが、個別性尺度との間に相関がみられなかったのはなぜだろうか。河合(1988)は、巧みな比喩を用いて、「峰の孤独」と「谷間の孤独」という2つの孤独について説明している。谷間の孤独とは、人里離れたところに住むようなものであり、「これは孤独とは言うものの、谷間のなかに包みこまれているところに特徴がある」(河合, 1988, 140頁)という。一方、峰の孤独とは、峰の上にもまったく露呈されてしまっているようなものであり、「言うなれば孤独にさらされている」(河合, 1988, 140頁)のである。「孤独感をもつのは主観的にはつらく苦しい体験であるが、一方で、自我を確立するうえで必ずしもマイナスの意味をもつとは限らない」(中川, 1997, 15頁)。むしろ、そのような過程においては、河合のいう峰の孤独は避けて通れないものであろう。単なる寂しさではなく、真の個別性に気づいた者こそ、他者とポジティブな関係を結ぶことができると思われる。

しかし、個別性尺度の質問項目を見ると、「5. 結局、自分はひとりでしかないと思う」「9. 人間は本来、ひとりぼっちなのだと思う」「11. 結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う」「12. 私とまったく同じ考えや感じをもっている人が、必ずどこかにいると思う(逆転項目)」「13. 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う」など、ややネガティブなニュアンスに感じられやすい文章になっている。これらは、孤独感を克服したレベルを

とらえているとはいいがたく、心理的支えとそれほど相関がないのは、むしろ自然であると考えられる。質問紙調査において、このようないわゆる峰の孤独感をとらえることはかなりむずかしいだろう。

また、内面的支えは、個人志向性・社会志向性ともに相関がみられた。このことは、内面的支えが、単に自分を内面的に支えるというだけではなく、内的・外的規範を重視する姿勢につながることを示唆している。内面的支えは、われわれが現実的次元をしっかりと生きていくために重要な支えであるといえるだろう。

## 注

- (1) 小松 (1993) は、端的に「[異界]とは、境界の向こう側に広がっている世界である」(小松, 1993, 10頁)と述べている。また、「[異界]は人間の内部にも存在している。秩序づけられた社会的な意識と、反社会的なしかし通常は抑圧され封じ込められている意識ないし欲望である」(小松, 1993, 8頁)とも指摘している。このように、宗教性による支えと「異界」とは、深い関わりがあると思われるが、この点については稿を改めて論じてみたい。なお、心理療法過程と「異界」との関連を論じたものに田中 (1995) がある。
- (2) 嶋 (1996b) は、このような性差の背景について「社会的に男子の方にサポートを受けることの負債感(他人に頼るのは恥ずかしいことだ、問題は自力で解決すべきである、などの思いこみから生じるもの)が強いためと考えられる」(嶋, 1996b, 34頁)とも述べている。

## 引用文献

- 伊藤美奈子 1993a 「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』64, 115-122.
- 伊藤美奈子 1993b 「個人志向性・社会志向性に関する発達の研究」『教育心理学研究』41, 293-301.
- 伊藤美奈子 1993c 「個人志向性・社会志向性からみた非行少年の自我構造」『心理臨床学研究』11, 36-43.
- 川原誠司・平林秀美 1995 「大学生のサポートの Seeking に関する研究」『日本発達心理学会第6回大会発表論文集』237頁.
- 河合隼雄 1988 「[峰の孤独]と[谷間の孤独]」『新潮45』7(11), 140-142.
- 小松和彦 1993 『日本人と異界(NHK人間大学テキスト)』日本放送出版協会.
- 串崎真志 1996 「心理的支え尺度の作成」『日本心理学会第60回大会発表論文集』109頁.
- 串崎真志 1997a 「心理的支え尺度の作成(2)」『日本心理学会第61回大会発表論文集』31頁.
- 串崎真志 1997b 「こころの支えとはなにか—心理的支え試論—」『大阪大学教育学年報』2, 197-207.
- 中川純子 1997 「青年における孤独心性③—非言語的表現法である箱庭を利用した検討—」『箱庭療法学研究』10(1), 15-26.
- 落合良行 1974 「現代青年における孤独感の構造(I)」『教育心理学研究』22(3), 162-170.
- 落合良行 1983a 「現代青年における孤独感の構造(II)—その発達の变化の検討を中心にして—」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学編)』33, 189-203.
- 落合良行 1983b 「孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成」『教育心理学研究』31(4), 332-336.
- 嶋 信宏 1994 「ソーシャル・サポート志向性に関する基礎的研究」『日本社会心理学会第35回大会発表論文集』404-405.
- 嶋 信宏 1996a 「ソーシャル・サポート」日本児童研究所(編)『児童心理学の進歩XXXV』金子書房, 193-218.
- 嶋 信宏 1996b 「ソーシャル・サポート志向性に関する基礎的研究」『中京大学社会学部紀要』11(2), 19-37.
- 田中康裕 1995 「心理療法過程における「内なる異界との交通」—極度の対人緊張を訴えて来談した青年期男子の事例から—」『心理臨床学研究』13(1), 85-96.
- 和田 実 1989 「ソーシャル・サポート(Social Support)に関する一研究」『東京学芸大学紀要 第1部門 教育学』40, 23-38.
- 周 玉慧 1994 「ソーシャル・サポート研究の概観」『広島大学教育学部紀要 第1部(心理学)』43, 141-148.

# **A Study of Psychological Support : In Relation to Social Support Orientation, Loneliness and Individual-Social Orientedness**

Masashi KUSHIZAKI

To examine the relationship between psychological support with (1) social support orientation, (2) loneliness (sympathy, individuality) and (3) individual-social orientedness, questionnaires were administered to 75 students (age from 19 to 28). The factor analysis on psychological support extracted four factors: intrapersonal support, support from friends or parents, support from boyfriend or girlfriend and religious support. 'Support from friends or parents' had a significant correlation with social support orientation. All psychological support scales showed significant relation with sympathy scale but not with individuality scale. Intrapersonal support was related to both individual and social orientedness. These results suggest that intrapersonal support may coexist with the attitude to appreciate inner or social value. The intrapersonal support would be important to live a realistic life.